



「80歳まで眼科医を続けて」

ひねのたえこ
日根野 妙子

1929年(昭和4年)
江戸川区南小岩生まれ、
南小岩在住



明治生まれの強い母

私はきょうだいが4人。1番上の姉が5歳上、2歳上が兄、私が3番目、妹が4歳下。きょうだいみんな、母の強さに押されたっていうところがあるんです。働くことに対しての積極的な気持ちをもっていたんですね。だいぶ大人になってから、自分で仕事をするようになって、「お母さんは、自分がやりたかったことを私たちにやらせたんだなあ」と思いました。兄も医者、姉も私も医者で、妹が看護師になりました。

よかったですね。仕事が苦にならずに今までやってこられたってことは。きょうだいみんなそうだったんだろうと思います。母は自分でも助産師をしていましたから、子どもにも自分の腕で食べられるような女の子に思ってたのね。

私の母は明治31年生まれです。九州の田舎に育ちました。あのころの人はじつに進取の気性にあふれていますね。男も女もね。女の人が自分で仕事を持ってね。今高校生ぐらいで何かならうとは思わないでしょう。母親も女の子を持っていたら、早く嫁にと思うでしょう。母には姉がいて、とっくに結婚して子どももいたんですけどね。その姉と同じ道を行かなかったのは、勉強が好きだったんですね。女学校を出た時に、貸費生制度のある東京女子医学専門学校に申し込んだ。「親御さんの承知の手紙があれば、どうぞ来てください」と返事がきたので親に見せたら、「とんでもない、金を借りてまでやることか」と反対されたそうです。そしたら、母の祖父が「俺の小遣いを少しやるから、ほかのことをやりなさい」って。看護師と助産師の資格を取って、九州で助産院を開業したんです。結婚後、小岩へ来てからも60過ぎまでやっていました。頑丈な人で、病気もせず97歳で亡くなりました。

私の青春

私は昭和4年、南小岩の生まれです。小学校は大相撲の横綱栃錦が出た学校で、下小岩小学校。千葉街道と小岩駅との真ん中辺りにあります。

母は兄を医学部に。姉は絵が好きだから、美術学校

へ行きたいと言ったら、母が「絵なんて描いたって生活できないよ、職のあるところに行きなさい」って。それで医専を選んだって。3番目の子というのは、親にかまわれなんでしょうよね。私はたいてい姉の真似をしていましたから、その時になったら、私も医専へ行くんだろうなと思っていました。妹は末っ子だから、父にかわいがられる。英語が好きでその方面の大学へ行きたかったようです。でも、父が失業し、母の様子を見て、看護学校で看護師と助産師の資格を取ったのです。

私にはあまり遊び友達がいませんでした。「本の虫」で、家に帰って大人の本でもね、ご飯も食べずに本を読んでいた。あのころね、『宮本武蔵』という本を、毎月1冊ずつ父が買って帰るんです。玄関で待って一番先に読みました。父が私の本好きを認めてくれていたのでしょう。小遣いを貯めて「本を買う」と言った時、お金を助けてくれたのを覚えています。

東京府立第七高等女学校(現小松川高校)へ姉が行ったので、私も妹も行ってのね。その後、大田区蒲田の東邦女子医専に5年間。国家試験が終わってね、そこで何をしようかといろいろと考えて、やれると思ったのが眼科なんです。医専が途中から東邦医科大学となり、卒業して眼科の助手になり、大学の病院に8年半いました。

大学病院で働いていた時期が一番楽しかったね。私の青春です。私と同級生が入った時に教授が替わったんです。私たち2人、いっしょうけんめい楽しく働きました。その時に一緒だった友だちは5年で結婚したんですけどね。たった5年なのに、ほんとに人生の大事な部分の付き合いでしたからね。いつも一緒に、どこかに用事を言いつけられて行くのにも2人で行くので「2人で行くことないでしょ、ひとりできなさい」って先生に怒られたものです。私たちは家庭環境も似ていたんですね。ご両親も歯医者さんで、ご兄弟も医療関係で。だから、気持ちもぴったり一致してね、ほんとの姉妹みたいにつながる人で、仲良く、ほんとに仲良くしました。

ここでも母がね、「結婚もしないでのおんぴり安月給でいい」と私の就職先を決めてきちゃったんです。川崎にある大きな企業の病院の眼科です。たしか大学病院の時1万円ももらってなくて、その病院に行ったら3万円くれました。

私もね、20代に結婚の話があったんです。まだ自分の腕が十分ではないから、嫁にいくどころじゃないわよと、私が蹴飛ばしたんです。嫁にいくのなら、医者^{いしや}の学校に行くことないですものね。それからは話がきても、仕事をやってる最中にそういうことに気を遣いたくなかったですよ。

結婚、開業、離婚

兄が結婚して、嫁さんが家に入ってきました。私は邪魔なわけですよ。やっぱり出なきゃと思ってたところへ、親が結婚の口を見つけてきてね。30代半ばで、相手は内科、結核専門の医者で清瀬の病院勤務、再婚でした。私もだいたい年を取ってきたので、結婚しないで医者^{いしや}を続けているのは立派みただけで、女だからと親は思いますよね。私は、家を出るチャンスだと思って結婚したんです。



◆昭和30年代の小岩駅

ちょうどうちの親があちこちに貸家を持っていたので、その1軒を貸してあげるといって借りました。私は小岩駅近くの眼科医に、主人は清瀬ですから、どちらが通勤するにしてもつらい。うまくやろうと思えばね、やり方もあるんでしょうが、でも私はそういうところまで気を遣わずに自分は自分で働きたいということですね。仕事のほうが80から90パーセントでね。やっぱり、相手の気持ちとずれてきました。実際、別居するしかなかったんですよ。昭和42年に小岩の自宅を開業しました。挫折してがっくりということではなくて、仕事があるから、仕事が毎日続いているから、朝いやでも起き、起きれば具合悪くともちゃんとなっちゃうんですよ。そういう日の連続でした。別居生活の終わりは離婚みたいな状態で、延々と長かったですから、昭和61年に離婚の手続を終え、私自身すっきりしました。

でも、人生のうえで、結婚したことは確実にプラスになっていると思います。結婚しなくちゃわからないこと、いろいろあるじゃない。それと、配偶者がいると立場として強いんですよ、社会的立場。女ひとりでは医者^{いしや}をやって、「偉いですね、立派ですわね」と言われるけど、女ひとりでは男より一段低く見られてしまうんですよ。

医院は平成20年の暮れに閉めたんです。80歳まで働く大変さは、患者さんを診るのが大変というより、患者さんを診るのに付随した事務のほうがね。診療事はやらないけど、近所

から通いで手伝いに来てくれる女の人はいました。年は5つ下で、人柄がよく、留守に鍵を預けたって安心だし、最後は親戚みたいになりました。患者さんと話をし、世話をやき、接客もうまい。ほんとにいい人に巡り合いましたよ。

開業しているってことはね、大変なんです。私、からだはよっぽど丈夫に産んでもらったと思うんですよ。病気で休んだことがないです。医院は具合が悪くても開けちゃう、仕事はやれるんです。終わったらバタンですけど。

活字好き

本を見つけるアンテナはまず新聞ですね、広告だけじゃなく、書評を見るんですよ。小さい時からきょうだいがあまり遊んでくれなかったから、本を読むほうへいっちゃったでしょう。うちの父も本が好きだったから、物置に棚を作ってね、私はこっそり行って読んじゃうとか、母親^{お母さん}が筆筒の中^{なつか}にしまっておいた本を読んじゃったりね。だから、『主婦の友』とか毎月来る本はみんな読んじゃうし、そういうので時間が潰せるから、幸せだったと思う。不自由なんて感じたことは1度もない。「活字好き」というのは、年を取ると特に幸せを感じると何かに書いてあったけどね。私もほんとにそう思う。歴史ものが好きでしょ、これはと思う感じがあるとその本を買っちゃいます。それから本屋さんで時間を潰すことも好きなんです。楽しいですね。

お裁縫も好き、編み物も。実家にいるところは家じゅうの編み物を全部一手に引き受けました。小物づくりも何でも、作るのが趣味ですから。できあがると楽しいですね。

小岩で生まれ育って、小岩を全然離れていませんが、いいところね。小学生の時、学校のすぐ前に文房具屋さんがあって、お昼のご飯がなければ「ジャミパンをちょうだい」と言うと、おばさんがパンにジャムを塗ってくれて、校門のところで渡してくれる。

思い出の風景という江戸川の川べりです。結婚していた時にはいろいろとね、ほんとに相手を蹴飛ばしたくなって、腹をたてたりした時、夜になって江戸川の土手を松の善養寺、あの辺まで行ってね、しばらく座っていると落ち着きますね。終生小岩で、いや、死ぬのはどこだかわからない、85年ですからね。

今、あの強い母を振り返ると、ほんとにお蔭様なんです。母が亡くなった時、私は母とあんまり仲良くなかったんで、「死んだって涙なんか出るはずがない」と思っていました。でも、告別式の朝、ご飯が食べられなかったですね、一口も。私も人並みなんだなあと思いました。私がやったことで、母も満足したこともあったと思いますよ。

自分で選んだ人生を素晴らしいといっいいかわかりませんが、マイナスではなかったと思っています。

